私
の
顔
は
誰
も
知
ら
な
い

はじめに

「この本に出てくる女性たちは、どんな服装が多いですか？」

タイトルについて悩んでいるとき、打ち合わせの席でブックデザイナーの吉岡秀典さん（セプテンバーカウボーイ）から、そんなことを聞かれた。私は考えるまでもなく、こう答えた。

「普通です。そのときどきで流行っている、女性らしい服。『これを着ておけば普通の人に見られる』とわかっていて、選んでいる人が多いです」

言った後、そんな言葉がスラスラ出てくる自分に驚いた。実際に、何人かの女性たちから聞いた台詞であり、過去の私自身のことでもある。が、あらためて言葉にすると滑稽だ。ど

うして私たちはこうも、〝普通の人に見られる〟ことを意識してしまうのだろう。

しかし、その答えにインスピレーションを得た吉岡さんは、一見、まっとうなのに、よく見るとズレたり傾いたり予想外の姿を見せるブックデザインを考えてくれた。これこそまさに、本書のテーマといえる。

もちろん服装のことだけを言っているのではない。『私の顔は誰も知らない』とは、社会に適応することを最優先するあまり、本来のパーソナリティが完全に隠れてしまったかつての私であり、似たような経験を持つ、多くの女性たちを表した言葉だ。

情報過多な時代に〝らしさ〟から逃れることは難しい。こうして「はじめに」を書いている二〇二一年七月の現在も、ネットを開けば、性的な格好の女性モデルを使った青年会議所の公開討論会のチラシが物議を醸している。アンチフェミニストたちは、現象だけを見て「この程度で騒ぐな」と言う。しかし、根本の問題は、日常で目にするこうした表現の数々から、女性の身体は客寄せに使っても良いというメッセージを受け取ってしまうことだ。外見ばかり重要視されることで人として対等に生きる土台が、無自覚のうちに奪われてしまうのである。

これはフェミニズムの問題に限らない。学校教育では異端が排除され、社会に出れば、ルールに適応することを求められる。外から入ってくる価値観に振り回され、偽りの自分でしか生きることができなくなってしまう。自分の発言を黙殺し、まったく違う人間を演じることが当たり前になってしまうのだ。

本書は、二〇一九年五月から二〇二〇年八月にかけて、誠文堂新光社のWEBマガジン『よみもの.com』及びnoteにて連載した『生きるということは、延々繰り返される消費活動なのか』を、大幅に加筆、改稿したものだ。

当初は、私自身のエッセイがメインになるはずだったが、写真家としての私の日常はとにかくいろんな女性と会う機会が多い。撮影でも会うし、個展に来てくれたお客さんとの出会いもある。不思議なことに、〝なぜ女性は偽りの姿で生きている人が多いのか〟というテーマで書き始めると、どんな女性と会っても、そのテーマを軸に語れてしまうことに気がついた。結果的に、女性たちへのインタビューが半分を占めたが、個人の集合体こそ、社会である。多くのエピソードを通して、初めて見えてくるものがあるのではないか。

連載の途中で、新型コロナウイルスのパンデミックが始まったため、最初の緊急事態宣言中の話など、今となっては懐かしい話も含むが、当時の出来事はそのまま掲載することにした。

本書を通して、私たちが生きる社会がどういうものか、少しでも考えるきっかけになれば嬉しい。

もくじ

はじめに 3
私の顔は誰も知らない 9
理想の猫とは？ 24
普通を演じる 28
コンクリートの上のシロクマ 36
薬で性格を変える 47
こうあるべきまともな姿 56
東京は擬態する場所 62
何者かになるための買いもの 74
人間であることを疑う 80
「自分」とは誰か？ 96
普通の人すぎて驚かれる 102
蛭子能収になりたい 106
女子校出身者のパーソナリティ 118
フェミニズムは避けられない 126
本当の自分はどこにいる？ 132
写真とフェミニズム 140
カワイイの基準 144
見た目だけで惹かれる 148
人間のねじれ方 154
健康は人による 162
うつらうつらを許さない社会 167
魅惑の「死」 187
死神とのドタバタ劇 193
独り言を叫ぶ 203
欲望に見る一筋の光 211
つきまとう表現衝動 214
フリマアプリに人生を学ぶ 219
モニターの向こう側で 227
私は正常に生きてます 233

寸劇コミュニケーション 241
自信を持つ難しさ 245
パワースポットでＳＮＳ地獄を見る 254
「怒」が足りない 260
「素を見せろ」の正体 268
味覚は信用できるか 279
自分のことはわからない現象 284
人類は、皆クズ 288
引きずられるとは？ 292
続・普通を演じる 298
理想が飛んでくる 306
勝手にイニシエーション 314
「ふぁふぁａ」を辿る 338
写真を通して「私」になる 351
初期作品に見る混沌 365
なぜ女は擬態するのか 371

私の顔は誰も知らない

なぜ多くの女性は、これほどまでに偽りの姿で生きているのだろう。いろんな女性から話を聞くなかで、そう思うことがよくある。いかにも普通を装って、あるいは違う自分を作り、本来のパーソナリティを隠している。でも考えてみれば、私も昔はそうだった。だから今、こうした写真作品を撮っているのだろう。そんなことをテーマに書いていこうと思う。

私は写真家で、ホームページで募集した一般の女性を被写体に、ポートレート作品を撮っている。ほかの写真家との違いは、撮影前に被写体の女性から時間をかけて話を聞き、相手を知ることから始めるところだ。これまでどんな人生を歩んできたのか、経験したことや感じたこと、考えたことを聞き取り、そこから写真のイメージを膨らませていく。人の心を掘り下げるという作業は簡単ではないので、話を聞きはじめると三時間くらいはすぐに経つ。

ほとんどの女性は、長い時間をかけて自分の話をするという経験がないため、初めて人に打ち明けるという話も出てくるし、喋りながら自分の本音に気づくということもある。そうした過程を経て撮影に入るので、写真に写る姿も普段とは違う。どれくらい違うかというと、個展会場に本人が現れても、周囲の誰もそのことに気づかないということがしばしば起こりうるくらいだ。写真のなかで表現したい自分と、日常生活で見せている自分が、それほどに違うということだろう。

なぜそうした写真を撮るのかと聞かれることがある。その答えは、私に限ったことではなく表現者全般に言えると思う。アーティストは、作品のなかで繰り返し自分のトラウマを表現するものだからだ。

そう考えるようになったのは『記憶を消す子供たち』（レノア・テア／草思社／一九九五）という、抑圧された記憶を研究している精神科医の書いた本を読んだことがきっかけだ。このなかに、あるミステリー作家が、幼少期の強烈なトラウマ体験を、無自覚のうちに繰り返し作品のなかに登場させていたという実例が出てくる。しかも当人は、体験の一部を完全に忘れていたにもかかわらずだ。

私はそれを読み、あらゆる表現衝動の根っこにはトラウマが潜んでいるのだろうと解釈した。それは自分自身や、周りの表現者を見ていてもそう思う。作品のなかで絶対的にこだわる部分、その表現でなくては自分の作品とは言えないもの、というのが作家にはある。そう

2018『書面上の幸福』日和

した衝動の根っこには、抑圧された記憶が潜んでいるのだろうと私は思う。

では自分のトラウマとは何なのか。と考えれば、おそらくそれは子ども時代にひたすら周囲に合わせてわかりやすい人間を演じようとし、そうしなければ生きていけなかったことだと思う。この世の中に私の頭のなかを理解できる人間なんていると思わなかったし、受け入れられるとも思わなかったし、自分の主張を話すなんて考えたこともなかった。そういうわけで、まずは自分の話から書いてみたい。

小学生のころの私は、まったく勉強のできない子どもだった。通知表はほぼオール二で運動神経も悪く、皆が当たり前に理解していることを私だけ理解できないことが多々あった。例えばクラス全員が、ほとんど教わらなくても引き算を理解していることの意味がわからなかった。先生が作ったオリジナル表記のサイコロを使った算数のゲームは、皆は楽しく遊んでいるのに私だけルールが理解できず何をしているのかわからない。天体観測は、空に星があるというだけで、星座という概念も、判別がつくことの意味もわからなかった。イニシャルを教わったときは、イニシャルというものがこの世に存在する理由がわからずパニックになった。とにかくこの世界のありとあらゆるルールについていけなかったし、目の前で繰り広げられることのほとんどに興味が持てなかった。私はきっと皆とは違う種類の人間なんだろう、そう思っていた。

学校教育で評価基準となるすべてが最下位レベルで劣っていて、その上、子どもが遊ぶ鬼ごっこのような遊びも、何が楽しいのかさっぱりわからなかった。そもそも、自分が子どもでいる、ということが面白くない。絵を描いても大人のように上手くは描けないし、一人でどこかへ出かけることもできない。何をしても誰と話しても面白くなくて、ひたすら毎日が退屈だった。それでも一人でいるのは恥ずかしいので友だちは作る。そのためには、ほかの子どもと同じような子どもでなくてはならない。皆が楽しいと思っているものを楽しいと感じ、笑うタイミングで笑い、驚くタイミングで驚き、皆が言いそうなことを言う。いつでも周りのリアクションを見ながら相手に合わせ、適当にやり過ごしながら、早く子ども時代が過ぎろ！　と願いながら中学までを過ごした。

高校生になると、時代は女子高生ブーム真っ盛りだった。それ以前は、高校生など子どもだと思われていたはずなのに、あるときから急に「女子高生」が注目されはじめ、もっとも女として魅力がある年齢とみなされるようになったのだ。

私が入学した九六年は、まさに「援助交際」という言葉が流行語大賞のトップテンに入った年でもある。高校の「制服」に、女としての付加価値が付き、女子高生というだけで値段がつく。女子高生の記号は、短いスカートにルーズソックス、ガングロ、茶髪、語尾を上げ

た喋り方で、彼女たちはコギャルと呼ばれていた。ブームというのは恐ろしいもので、当時は社会全体の同調圧力で女子高生のイメージが固められていた。女子高生は、ブランド好きで、ヴィトンのバッグ欲しさに援助交際をしており、将来のことなど考えない。今の高校生とは比べものにならないほど見た目も派手だったし、世間がイメージする「女子高生」を体現している女子が、社会でもっとも価値のある存在だった。彼女たちは、ヒエラルキーの頂点にいることを自覚していたから、社会人の男女より、はるかに自信を持って渋谷を歩いていたし、大人の男性たちは怯えるような目で女子高生を見ていたように思う。そして、世間のイメージから外れた「普通の女子高生」は、メディアから完全に無視され、いないことにされていた。

私は校則の厳しい都内の私立女子高に通っていたので、そこまで派手な格好をしている生徒はいなかったけれど、それでも日焼けサロンで肌を黒く焼いた女子も、放課後になると厚化粧をしてルーズソックスに履き替える女子も当たり前にいた。

私はというと、当然そうした女子高生文化に興味はなく、プリクラもカラオケも友だちとの会話も何ひとつ面白くなく、相変わらず何をしても退屈だった。友だちはコギャルではなく普通の女の子たちだったが、それでもほかの子が当たり前に楽しんでいる行動が、私にはただの消費に感じて面白くない。私の家庭は校則に従って高校まではアルバイト禁止だった

ので、外に世界を広げることもできない。何も生み出さない毎日が耐えられず、何をしたら楽しくなるのか見当もつかなかった。社会の作った女子高生にはならないぞと気負うあまり、流行り言葉を一切使わず、ルーズソックスは一度も履かず、当時、池袋西口にあった芳林堂書店本店の「心理」の棚の前で一人本をあさっていたけれど、だからといって晴れやかな気持ちには少しもなれない。友だちと喋って瞬間的な「楽しい」は感じても、常に虚無感が付きまとった。毎日、毎日、自分と相反する価値観のなかに放り込まれていれば、頭が狂ってくるほうが健全な反応だ。しかもその価値観は教室を飛び越えて、社会全体からも向けられている。

そのストレスは私だけではなかったと思う。実際、高校のクラスメイトのなかには、コギャルばかりいる女子大に進学したことが原因で精神不安定になって中退した子もいたし、コギャルの集団を見ただけで悲鳴を上げて帰ってしまうほど拒否反応を示していた子もいた。大量生産されたコギャルと女子高生が絶対的な価値で、その基準でしか自分を見られないという状態は地獄だったと思う。しかも大人は「今が人生で一番楽しいときだよ」とプレッシャーをかけてくる。まるで青春時代を楽しめない人間は一生後悔するぞと言わんばかりだ。

あれが好き、これが知りたいと自分から好奇心を持つ前に、「人生を楽しみたいなら、これに興味を持ちなさい」「こういう人間になりなさい」と先に提示されてしまうのは恐ろし

いことだ。情報にさらされすぎて、ほかの選択肢が完全に見えなくなる。思春期であればなおさらだ。自分の感性で生きるということは、高度消費社会で本当に難しい。だから、二十年経った今でも、相変わらず「個性」とか「ありのままの自分」という言葉がもてはやされているのだろう。

高校を卒業した私はその後、短大生となるが、自由度が広がって何かが変わるかと思ったら何も変わらないことに愕然とした。相変わらず何をしても、誰と話しても楽しくない。この世界は何かが違う、自分はほかの人間とは決定的に何かが違うという気持ちがぬぐえない。

学校はクリエイティブ系の学科だったけれど、それでも私は馴染めなかった。映画も小説も、他人の作り話にしか思えなかったし、スポーツやオリンピックは他人の祭りにしか感じなかった。アニメや漫画オタクの集団は、ものを買うことで自己主張している人にしか見えなかったし、演劇や音楽やサブカルも、そこに属する一塊の記号にしか見えなかった。パッケージ化された女子高生と何も変わらない。

都心のショッピングビルには、どのメーカーでもシーズンごとにほぼ同じデザインの服が並び、若者は選択の余地なくそれを買っていく。一年経てばまたその年の流行が入れ替わり、皆で同じデザインの服に買い換える。よく外国人から「日本の女の子はみんな同じ格好をしている」と揶揄されるけど、同じ服しか売ってないのだから仕方ない。流行に抗おうとすれば、質の高いものを選ばなければいけないから余計にお金がかかるのだ。

皆が同じ服を着て、同じテレビを見て、同じゲームなり音楽なり映画なりを見て、同じ飲食店に行列を作って、同じ話題で喋っている。この世の中で趣味と呼ばれるもののほとんどは、ただの消費活動にしか見えなかった。それの何が楽しいのかさっぱりわからなかった。ある日ふと、相田みつをのパクリみたいな詩をデザインした手帳が、店頭で大量販売されているのを見たとき、こんな世界で生きていくのは心底嫌だと思った。生産者側に若者の消費行動をコントロールしようとする意図がありありと見えたからだ。生きるということは、延々繰り返される消費活動なのか。人はものを買うことでしか人間になれないのか。別に相田みつをのパクリに失望しているのではなく、逃れられないシステムをそこに見て絶望したのだ。

当時私は、一人でビデオカメラを持って映像制作をしたり、遊び程度に写真を撮ったりしていたけれど、周りにいるアート志向の人間と一緒にいても何も共通点を見つけられなかった。彼らは何の抵抗もなく健全な精神状態で、話題の映画を観たり、本を読んだりテレビを観たりしている。けれど私には、情報そのものがストレスでしかなかった。少しでも何かの

影響を受けて自分が殺されていくのが嫌だった。自分の価値観を固定するまでは、誰にも支配されたくない。メディアによる情報をなるべくシャットアウトして生活していたが、当然その考え方は、世間の常識と百八十度違うものだ。「クリエイティブなことをしたいなら、多くの映画を観て、多くの本を読まなきゃいけないよ」と忠告される。それが十人中十人にとっての正解だった。

友だちという概念も嫌いだった。友だちというのは、定期的に集まって一緒に消費活動するプレイにしか思えなかった。そのことに何の意味があるのだろう。昨日と今日を比べて進化がない、発展していかない日々が耐えられなかった。

このころから私は友だちと群れるのを止め、一人で行動するようになっていたけれど、相変わらず人前では、自分が考えていることなんて話さなかったし、ほかの人と同じような人間を演じていたし、皆が言いそうなことばかり言っていた。行く場所によってキャラクターを変えていたし、どれが本当の自分でもなかった。

その後、短大を卒業した私は、編集プロダクションで雑誌の編集者として働くことになった。就職活動などしていなかったけれど、たまたま求人を見つけ、三日麻疹にかかって熱が下がった翌日、フラフラになりながら私服で面接を受け、朦朧とした頭で適当な原稿を書いたら、なぜか受かったのだ。

そこは社長とスタッフ四人ほどの小さな会社で、主に男性誌を中心とした雑誌記事を作っていた。編集といっても書く仕事が多く、ライター志望者の集まりのようなものだ。給料十三万円で、初日からいきなり原稿を書くことになるほど忙しく、徹夜や土日出勤は当たり前。仕事のやり方は教えてくれず、何をするのが正解なのかもわからないまま仕事が飛んでくる職場だった。私と同時期に入った男性二人のうち一人は、一週間で「精も根も尽き果てた」と置手紙を残して逃げてしまった。社長は残ったもう一人の男性に期待をかけていたけれど、その男性も半年ほどで辞めてしまった。私は、お茶の出し方も、タバコの買い方も、地図の見方も、電話の受け答えもわからず、毎日怒鳴られてばかりいた。テレビを見ないので、芸能人の名前も、世の中で何が流行っているかもわからない。一生懸命、普通の人のように振舞おうとするが、そのことでかえって怒られる。「才能ないなら死んじまえ！」、「ほかの人間と同じことしかできない奴はいらない」など、握り潰した紙を頭に投げられたり、ゴミ箱を蹴られたりしていた。けれど私は逆に、その言葉にえらく感動していた。学校で強制されていた価値観と真逆だったからだ。他人と違うことが求められる世界なんて、天国のようだ。

しかも、それまで家では門限があったのに、0時を過ぎても仕事が終わらないおかげで親から何も言われない。夜型の私は、深夜に一人で街を歩けることが嬉しくてしょうがなかった。

学生のころは、ことあるたびに大人から、「学生時代が一番楽しい」「仕事は大変だよ」などと言われていたけれど、とんでもない嘘をつかれていたもんだ。こんなことならもっと早く仕事していればよかった。学生時代なんて二度と戻りたくない、そう思った。

しかし、社長はそんな私を自主退職させたくてしょうがなかったらしい。これは後から聞いた話だが、三人採用して二人辞めさせ、優秀な一人を残すという計算だったようなのだ。ところが、もっとも即戦力のない私が残ってしまい、しかもなかなか辞めない。そのため一生懸命、嫌がらせをしていたらしい。けれど私は、どんなに理不尽なことで怒鳴られてもキラキラしていた。今までモノクロだった世界が色鮮やかに見えて、毎日が充実していた。

けれど八カ月が経ったとき、社長は頭を抱えながらこう言った。

「インベさんにこの業界は向いてない。方向転換は早いほうがいい」

そして、いつの間にか辞表を書くよう誘導されていた。「普通の人が何を考えているかわからない人には、この仕事は難しい」とも言われた。

仕事がなくなった私は完全に開き直った。すべての能力が平均以下で、特技というものを持っていない私は、文章を仕事にするくらいしか思いつかなかったからだ。この世でできることがなくなった以上、もう何をしたっていいじゃないか。しかも、それまでは自分が最底辺だと思っていたのに、世の中には私より仕事ができない人がいるという信じられない事実まで知ってしまった。もう怖いものは何もない。それまで、自分の創造する世界は誰にも理解できないだろうと思っていたけれど、それを見せることに抵抗はなくなっていた。そうして始めたのが写真だった。

そのころの私は、自分が持っている自己イメージと、人から見た他者イメージに大きく開きがあって、そのことが酷くストレスだった。一人鏡の前で見せる私の顔は誰も知らない。私が頭のなかで考えていることは誰も知らない。それまでの二十一年間、周りに合わせながらやり過ごしてきた私は、一眼レフカメラの使い方を覚えたことをきっかけに、衝動のままセルフポートレートを撮り始めた。たまにモデルを使って撮影することもあったけれど、そこには自分を投影していた。するとこの写真があっさりと周りに評価されてしまったのだ。人に見せるたび褒められ絶賛される。そんな経験は、今までの人生ではありえないことだった。

そのうちに、自分の人生よりも他人の人生のほうがはるかに面白いことに気がついた。映画や小説やメディアを通した情報ではなく、目の前のリアルな存在が一人ひとり違うストーリーを持って私の前に現れる。写真を撮るという目的のもとに、好きなだけ相手の人生を聞けるという状況は、撮影よりもはるかに楽しい作業だった。

そうしてわかったことは、この社会には、かつての私と同じように擬態して生きている女性があまりにも多いということ。「他人には理解されないだろう」と考えて、誰にも話して

2015『実態の薄い７つの子』No.17

いないことを持っていること。しかもそれは、普段は自己主張が少なかったり、まっとうに生きてるように見えている女性ほど、内面との落差が凄まじい。

多くの女性は、社会に適応して他者とコミュニケーションをとるために、いかにもその辺にいそうな人間に擬態していたのだ。

普通を演じる

「普通を演じてる。何かを常に演じてるんです」

蘭さんは言った。今年四十歳になる女性だ。

「実際は全然面白いと思っていなくて、ただ相手に合わせているだけだったりするんですよ。会話のなかで『〇〇が好き』と言われたら、私も相手に合わせちゃう。『何それ、教えて教えて』みたいな、さぞかし興味があるように。気持ち悪いですよね。よくよく考えたら酷いことしてるんですよ。でもそうしてしまう自分がいる。本当のことを言ったら周りに人がいなくなってしまうんじゃないかと思って、とにかく相手を不快にさせないようにしようとばかり考えてる。食事をする場所を決めるのも、自分の意見とかないし」

彼女は結婚七年目で、夫と実父の三人で東京近郊に住んでいる。職業は、ハイブランドのショップ店員。スマートでセンスがあり、いかにも黒いスーツを着て高級ブランド店に立っていそうな雰囲気だ。

「家に帰って素になれるかといえば素になれないんですね。近しい人にも取り繕っちゃう。親の前では良い子でいたいというのもあるし。旦那さんの前でもそう。あんまり深く関わっていないかもしれない。そうやって話すと空しいですね。結局全部を取り繕ってる。昔からです。本当の自分を人に見せられない。見せたいんですけど、誰に見せたらいいかわからない。そのつどそのつど封印しちゃう」

つまり彼女は、これまでずっと「普通」を演じ、誰にも素を見せずに生きてきたということだ。夫は優しく、お互い好きなことをして暮らしているという。一見何の問題もなく、うまく生きているタイプに見える。でもだからこそ、それは多くの女性が抱える普遍的な心理なのかもしれない。

「何不自由なく育って、幼少期のトラウマとかもないんですよ。でも、ああしちゃダメ、こうしちゃダメというのが自分の心のなかにあるんです。他者から何かを受けたとかじゃなくて、すべて自分のなかから沸き起こる。例えば、女性だったら綺麗にしていなきゃいけ

ないとか、痩せていなきゃいけないとか、ちゃんとしてなきゃいけないって。自分が人に好かれているかとか、嫌われてるんじゃないかとか、そういうことにとにかく敏感。人からどう思われてるのか、いつも気になってます」

実際、「他人の目を気にしろ」というメッセージはそこかしこにある。脱毛をしよう、ダイエットしよう、ナチュラルメイクで女子力をアップしよう。電車の広告だけでも無数にある。人間社会では、「そのまま」を求められていないのは明らかだ。

「自分探しじゃないけど、自分を求めてウロウロしてる。でもどれも自分じゃないし。本当の自分は自分でもわからない。でも、そんなもんなのかな？　そもそも自分ってなんなんだろう？」

とはいえ、偽りのまま生きていけるほど単純ではないのが人間だ。

「なんだかよくわからないんです。なんだかよくわからない感情が小さいときからずっとある。『自分はこんなんじゃないんだけど……』と思いながら生きてます。特に悲しい出来事があったわけではないのに、心のなかがいつも空っぽ。友人もいるし楽しく毎日過ごしているんだけど、なんかいつも寂しい気持ちのほうが強くて、体のなかを巡ってる。それが何なんだろうというのは、いつもずっと考えてます」

蘭さんはこれまで、自律神経を壊したり、摂食障害で食べたり吐いたりしているという。これほどストレスになる擬態を、どうして続けているのだろう。

「なんとなく良い子でいなきゃいけないというのがあったんですよね。小さいころに母親から『近所の〇〇ちゃんはこうだったんだよ、偉いね』とか、『△△ちゃんは、お母さんのお手伝いをしたんだよ、私もそういう子どもが欲しいな』とか、寝るときにすごい言われてた記憶がある。小学校高学年まで家族で川の字で寝てたんですよ。近所の同い年の四人と比較されて、ほかの子のことは凄い褒める。私は褒められたことがなかったかも。寝ながら母親のことをめっちゃ蹴ってました。どうにもならない気持ちを表現してたんだと思う。母親のことをあまり好きじゃないんですよね、きっと。……悪い人じゃないんだけど。こういうこと言ってると、どこかに母親がいそうで怖い」

そう言うと、喫茶店の店内をキョロキョロした。母親は一年前に亡くなっている。

「大人になっても母親の言葉はいちいち気になる。私の神経を刺激してくる。母親自身、周りの目が気になる人なんです。『□□さんはまだ結婚してない』とか、『××さんは孫がい

る』とか、母親自身が敏感で、それを私に言ってきました。私が言われたらどんな気持ちになるか考えない人。ズバズバ言うんです。今は母がいなくなったので、肩の荷が下りました」

「理想の猫」を求めてくる相手がいなくなって、やっと、自分の理想を模索する自由を得たということだ。

「他人と比較することをやめたい。人の目を気にするのをやめたい。充実した一日を送りたい。今は充実してるって思えない。何か満ち足りない。おおらかにいろんなことを受け入れたり、吸収したいんです。一瞬、楽しいことがあったとしても、よくよく考えるとそうでもないんですよ。相手は楽しそうだけど、自分は楽しくないとか。そこでも猫を被ってる。人と会ってても、頭が明後日の方向にいってる。ちゃんと楽しそうにしてるかな？とか考えてしまう。じゃあ逆に自分がやってて楽しいことって何？　って聞かれると出てこないんですけど……」

楽しい、楽しくないは、すべて人間関係で決まる。コミュニケーションが演技なら、何をしても楽しくはないだろう。しかも擬態は、仕事の場でも要求される。

「販売の仕事をしていたときは、上司から『お客さんを目の前にしているときは、自分を女優だと思え』と言われてました。人に合わせる。相手が不快な気持ちにならないように、楽しそうにしてる、笑顔にしてる。だから、悲しいことがあったとしても、そういう自分を見せないことが、けっこう日常でも癖になってるんですよね」

これはよくわかる。私の通うピラティススタジオでも、インストラクターたちは皆嘘くさい笑顔で溢れているからだ。オーバーリアクションで高い声を上げ、まるで幼稚園児を相手するように優しく話しかけてくる。社員教育でそのような接客を教え込まれているのだろう。本来の業務以外に、過剰なスマイルが義務になっているのはさぞかしストレスだと思う。しかも、その擬態は利用者にまで伝播し、更衣室での客同士のコミュニケーションも、台本が見えてきそうなほど嘘くさい会話で溢れている。

こうしたコミュニケーションに積極的に参加している人ほど、いつの間にか退会しているし、インストラクターの離職率も高い。実際に相当なストレスなんだと思う。

そして蘭さんは、擬態を止めることを選んだ。

「四十歳になって、自分のなかでうじうじ考えて毎日を過ごしてるのはもったいないって思ったんです。思いつめて死にたくなったりするんじゃなくて、私は生きていきたい。だ

からどうにかしたいんですよ。早く死にたいとか思わないし、むしろ長生きしたい。生きる気すごい満々なんです。だからどうにかしたい。でもいろいろ頭で考えすぎて、少し生きるのに支障がある」

演技しないで人と接したい。そのことがこれほど大変で、努力しなければ手に入らないことなのだ。

2019『〝今ここにいる人〟の演技』杏堂蘭

こうあるべきまともな姿

先日、面白い本を読んだ。

NPO法人スウィングの理事長が書いた、『まともがゆれる—常識をやめる「スウィング」の実験』（木ノ戸昌幸／朝日出版社／二〇一九）という本だ。

京都にあるNPO法人スウィングは、「こうあるべきまともな姿」から大幅にはみ出した「障害者」と、何か新しいことができるかもしれないという思いのもと、理事長の木ノ戸さんが、ありあまる熱意半分とやけくそ半分で設立した福祉施設らしい。

毎日十五〜二十名の障害者がやってきて「本当にどうでもいいこと」を朝礼で発言し、眠くなったら昼寝をすることが推奨され、特に理由もないのに休みを取る人には拍手が送られるという。

「ギリギリアウトをセーフに。どうしようもない弱さを強さに。そして、たまらん生きづらさをユーモアに」という熱い理念を掲げたスウィングの活動は、戦隊ヒーローに扮して清掃活動する「ゴミコロリ」、市バスの路線・系統を丸暗記している障害者コンビによるヘンタイ記憶パフォーマンス「京都人力交通案内」、芸術創作活動「オレたちひょうげん族」など多岐にわたる。特に創作活動は、大きな半紙に筆でしたためられた「親の年金をつかってキャバクラ」や、氷川きよしの切り抜きを集めてサイケデリック調にコラージュした作品など、想像の斜め上をいくものばかりだ。

木ノ戸さんの視点から語られる障害者との日常は、ブラックユーモアに溢れ、「障害者ってこんなに面白いのか！」という新鮮さに満ちている。

さて、木ノ戸さんがこの型破りな施設を作ったきっかけが、実に興味深かった。二十六歳のときに、障害者の福祉的就労を支援する福祉施設の職員として働き始めた木ノ戸さんは、そこにいる「職員」と「利用者」のわかりやすく二分化された構造と、そこから生み出されるいくつもの支配的なルールに疑問を持ったという。

たとえば職員は利用者から「先生」などと呼ばれていた。最初は最先端のギャグかと思ったが、残念ながらそれが当たり前の世界だったのだ。

先生たる職員の仕事は利用者を、社会が求める「こうあるべきまともな姿」に当てはめること。「もう、それ絶対無理！」というのは皆分かっているというのに、ほかの方法を考えるのではなく、むしろ「できないあなたが悪い」からまた指導・訓練するという不毛なループが延々繰り返され、支配的構造が強化される。

一体何のためにそんなことを？　と考えるのがむしろまともじゃないかと思うのだが、職員たちは悪意なき矯正に躍起になっており、その一方で自分たちを雇用する経営陣への服従っぷりも異様なほどだった。

（『まともがゆれる―常識をやめる「スウィング」の実験』百九十六頁）

衝撃だった。障害者にまで健常者と同じ「まとも」を求め、絶対にできないとわかっていながら、指導を続ける不毛な仕事がこの世にあるなんて。世の中ってそんなに効率悪くできているのか。

でもそれって、この世界そのものかもしれない。現代人の多くが精神を病んでいるけれど、その理由はこういうところにあるのかもしれない。私は読んでいてそう思った。

そこで思い出したのが自分の子ども時代である。

私はとにかく体育の授業が嫌いだった。飛んでくるもの恐怖症で、例えば今でも路上で子どもがボール遊びをしていると、自分のほうに飛んでくるかもしれない恐怖で足がすくんで前を通れない。そんなレベルだから、小学校でやるドッジボールは殺人ゲームにしか思えなかった。当時は硬いバスケットボールを使っていたから、ある女子児童は、顔面にボールが当たって眼鏡が割れ、顔に一生残る傷を作っていたくらいだ。私はいつも「殺される」と思いながら逃げていた。とにかくボールで攻撃されることが怖くて怖くて、なぜ皆が楽しそうにしていて、学校の授業で推奨されているのかがさっぱりわからなかった。

水泳も正しいフォームで泳ぐことができず、スピードを出すことができない。徒競走はビックリされるほど遅く、走り方も変と言われた。身体はとても硬く、前屈で手を伸ばしても地面から十センチ以上は浮いていた。まじめに授業を受けても通知表は二がせいぜいで、骨折して授業に出られない時期は一を付けられたくらいだ。

私はずっと、自分は運動ができないと思い込んでいたけれど、大人になると不思議なもので、たいていのことはそれなりにできてしまう。

あれほどできないと思っていた水泳は、ジムのプールに行けばフォームが間違っていようがそれなりの距離が泳げてしまうし、社会人になってからは、筋トレやエアロビやベリーダンスやボクササイズなど、健康のためにあらゆる運動をやってきた。ここ七年ほどは、ピラティスをやっているけれど、周りを見渡すと、自分より身体が硬い人がいて衝撃を受ける。子ども時代は自分の身体能力が底辺で、それより酷い存在はいなかったはずなのに。私自身は何も変わっていなくても、年齢とともに周りは動けなくなってくるから、相対的に自分の

身体能力は上がっていく。登山もするし、海も行くし、仕事では重いカメラを持って移動する。日常生活では歩くのがとても速く、男性と同じスピードで歩くので驚かれるほどだ。

そうなってくると、あの体育の授業は何だったんだろうと思う。私が「運動のできない人間」と思い込まされていた、あの膨大な時間は何だったんだろうと思う。授業で評価対象となるものがたまたま全部できなかったというだけなのか。けれど、そのせいで私は、劣った人間に振り分けられ、酷く劣等感を植え付けられ、覇気のない子どもとして萎縮しながら過ごしていた。

学校は、学校のルールでしか評価されない場所で、そこに当てはまらない人間は抹殺されていく場所だと今でも思う。

さて、福祉施設で絶対にできない「まとも」を求められていた障害者たちはどうだろう。ストレスを貯めながら鬱々と過ごしていた彼らは、スウィングに移るとたちまちその能力を発揮し始めたという。

いつも下ばかり向いていた増田さんが子ども相手にヒーローを演じるなんて。あんなに暴力的だったQさんが初対面の人の似顔絵を描くなんて。不安と緊張だらけのかなえさんが朝礼で発言するようになるなんて。でも増田さんは、Qさんは、かなえさんは、

本当に「驚くべきいい感じの変貌」を遂げたのだろうか。何だか少し違う気がする。たぶん彼らは変わったのではなく、本来の、混じり気のない、素っ裸の自分へと還っているのだ。

（同書二百六、二百七頁）

ひょっとすると、通り魔殺人犯も、引きこもりも、若者の自殺も、生み出さない方法はシンプルなんじゃないかという気がしてくる。逆に人を追い詰め狂わせる方法もきっと簡単なんだろう。

彼らは社会を反映している。家庭教育も社会を反映している。生きていく過程で「こんな場所では生きていけない」と思い込まされるような判定をされ続けてきたのだと思う。

スウィングの活動のなかに、人類が幸福を得るヒントが隠されているように、私は感じる。

死神とのドタバタ劇

「ツイッターで、毎日『死にたい』ってつぶやいていたら、『殺してあげます』みたいなダイレクトメッセージが来たんですよね」

十年ぶりに再会したスイカちゃん（仮名）は、喫茶店でお茶を飲みながら、そんなことを言うのだった。出会ったころはまだ十代だったが、現在は結婚して、すっかり大人の女性になっている。言葉遣いは丁寧すぎるほど丁寧で、清楚な服に、背筋もピンとしていた。そのしっかりした外見とは裏腹に、自殺願望は強いようだ。当時も激しい自殺未遂をくり返していたが、今もそれは変わらないらしい。とはいえ、理由は昔と違っていた。

「十代のころは、とにかく何かに怒ってる状態。もう嫌だ死にたいって気持ち。今は申し訳

なさとか、責任を取るためには死ななきゃみたいな、大人の理由にシフトした感じです」

スイカちゃんが結婚したのは、五年前。自分の気性の荒さを自覚していたから、穏やかな男性に惹かれたという。ところが、その後に勤めた会社でパワハラにあい、情緒の不安定さが加速したようだ。

「一年半前に鬱になって、通院を始めたんです。自殺したいのは、夫のことが好きだし大切だから、『いなくならなきゃな』という気持ちですね。私がいる限り、夫は私の面倒を見ないといけないじゃないですか。もし離婚したとしても、今度は夫がいない苦しみを私が味わうことになる。私が苦しまなくて、夫にも迷惑をかけないためには、私がいなくなるのが一番手っ取り早いんです」

もちろん、夫側がそのように思っているわけではないだろう。これまで、スイカちゃんが自分の首に包丁を突き付けたときも、夫は必死になって止めている。夜通し泣いたり、半日ほどダンボールのなかに立てこもったときも、夫は黙って見守っていた。

そして冒頭の、ダイレクトメッセージである。「死ねるんだったらお願いしよう」、そう思ったスイカちゃんは、なんとその男に会いに行ったそうな。

ツイッターを使って自殺志願者に近づき、実際に殺害する事件は、二〇一七年に起きたばかりだ。自宅アパートで男女九人を殺害した白石隆浩（当時二十七歳）は、すでに死刑判決を受けている。スイカちゃんが男と会ったのは、その事件のだいぶ後だが、今もツイッター上には、自殺志願者を募る殺人鬼が生息しているということだ。そして、死にたい人も多いのだろう。

「自分一人でも何度か死のうとして、富士の樹海に行こうと思ったこともあったんですよ。でも、意思が弱いから完遂ができないんですね。その人は、お金を渡せば殺してくれるという話だったんです」

やりとりは、最初のメッセージから、すぐに別のアカウントへ移行。足が付かないように、具体的な話は、会ったときに直接することになった。新宿のとある喫茶店で待っていると、男が現れた。髪はボサボサで、服も綺麗ではない。元ホームレスで、住所不定無職の三十五歳だという。

「暗そうな人です。印象に残らないタイプ。おじさんなのか、お兄さんなのかもわからない。町を歩いていてすれ違っても、気づかない感じですね」

その表現が、妙に生々しい。

「『いくら出せますか？』と聞かれて、五万円って答えたんですよ。そしたら、『実行するまでに一カ月間くらい隔離して行方不明の状態にするから。その間、かくまう場所や移動費や生活費とか、元の携帯を破棄して、飛ばしの携帯を持たせるための費用が必要』らしくて、経費が掛かるみたい。『五万円じゃ足りないから、ほかの人と抱き合わせでやらないと採算取れない』と言われたんです」

男にとっては、それが商売なのだろう。

「すでに何人か殺してると言っていたけど、果たしてどこまで本当で嘘かはわからない。今思うと、詐欺かなという気もするんですよ。『どうやって殺すんですか？』って聞いたら、注射と言われたんです。日本には、所有者のいない土地が存在していて、遺体はそこに持っていくと言ってました。私は詳しくないので、本当にそんな土地があるのかもわからないけど」

確かに、お金だけ取って、実際には殺さない可能性もあるだろう。被害者にしても、事情が事情だけに、警察には駆け込めないはずだ。スイカちゃんも、今となっては疑いの気持ちのほうが強いらしい。とはいえ、やたら細部が具体的でもある。

どちらにせよ、スイカちゃんは今、私の目の前にいるわけで、結局は殺されずに生き延びたということだ。一体、どのような展開があったのだろう。

「その男と雑談しているときに、趣味を聞かれたんです。私は、お人形が好きで、絵を見るのが好きで、音楽を聴くのが好きで、今は鬱で読めなくなっちゃったけど本を読むのも好きだった。そういう話をしていたんですね。そうしたら、『そんなに趣味がたくさんある人は、大丈夫なんじゃないかと僕は思います』と言ってくれたんです。本当に死ぬ人は、趣味を聞かれても何も出てこない人が多いみたい。『旦那さんもいるし、生きるんじゃないですかね』みたいなことを言われた。当時は、死ななきゃ、死ななきゃ、ってそればかり思っていたけど、その一言で、そうか生きていてもいいんだなって思えた。それで、結局、依頼はしなかったんです」

怪しい殺人鬼と思いきや、一転して、ちょっといい話である。しかし、スイカちゃんはそこまで楽観的ではないようだ。

「私と話してて、意思が弱いことがわかったんじゃないかな。途中で逃げ出して、足が付いたら迷惑だろうし、リスクヘッジの部分もあるんでしょうね」

確かに途中で逃げられたら、逮捕される可能性も高まるだろう。が、スイカちゃんの話は、そこで終わらなかった。

「初めて会った人に、『あなたは死ねないから、生きていたほうがいいですよ』なんて言われたことが嬉しくて、その人のことがすごい好きになっちゃったんですよ」

――へ？

私はおもわず、コーヒーを飲む手が止まった。自分のことを「殺してあげましょう」と言って現れた住所不定無職の男に、恋をしてしまうとは。予想外すぎる展開ではないか。

当時、鬱病で退職していたスイカちゃんには、わずかな貯金と、膨大な時間があった。一方、相手は無職である。

「マックスのときは、週二回は会ってましたね。相手も暇だから一日中ＬＩＮＥしてたし、私から誘って奢ったりしてました。全然カッコイイとかじゃないんですけど、セックスがすごくて、一晩で六回とかするんですよ。そういうところが良くて。貯金も減っていくのに止められなくて。一時は夫と別れて、その人と暮らそうかなと思うくらい好きでした」

とても自殺を考えた人間と、自殺幇助しようとした人間とは思えないアグレッシブさだ。ところが、二カ月も経つと、パッタリ連絡が取れなくなったという。パニックになったスイカちゃんは、なんと夫にすべてをぶちまけた。

「『今、好きな人がいて、その人と連絡が取れなくなっちゃって、すごく苦しいの』って、夫に伝えたんです。私の電話番号だと着信拒否されてるから、あなたから電話してってお願いした。今思うと、本当にどうかしてる。夫も夫で『わかった』と言って。最初はもちろん、相手も知らない番号に出ないじゃないですか。留守電にメッセージを入れてもらって、折り返しかかってきたんですよ。私は夫が電話しているのを横で聞いてて……」

かくして夫は、「スイカの夫ですけど、うちの妻がお世話になっております。スイカさんがあなたに会えなくてすごく苦しいらしいので、会ってあげてもらえませんか」と、伝えてくれたらしい。カオスな展開だ。

「『うちの妻がお世話になってます』という言葉を、ここで使うんだって思った。夫を見ながら、何やってるんだろうこの人って、自分が頼んだくせに思ったんですよね。そこから徐々に魔法が解けた。私のためにそこまでやってくれる人はほかにいないから、やっぱり夫が一番素敵なんだなと思いました」

そりゃそうだろう。底抜けに優しい旦那さんだ。
結局スイカちゃんは、その男とまた会い、また着信拒否され、また追いかけるを三回繰り返して今に至るという。大変なのめり込みようだ。

「好きの形が違うんですよね。夫は居てくれるだけで良くて、一生一緒に居たい人。その男とは、浮かれあがってお祭り騒ぎ。どちらにせよ自制心がないからそうなるんです」

それにしても、死にたかったスイカちゃんが追いかけて、死神男が逃げていくとは。しかも、そうなった原因は、スイカちゃんにあるという。彼女は、鬱病で仕事を辞めてから、毎晩酒を飲み、睡眠薬を飲んで寝る生活を送っている。酒と薬漬けで、一日の大半が酩酊しており、記憶がほとんど飛んでいるそうだ。そのため、何度も同じ質問を繰り返してしまうのだという。

「昨日も夫に『去年のクリスマス何してたっけ？』と同じ質問してました。でも、夫は普通に答えてくれるんですよ。その男にも同じ質問を何度も何度もしてたら、『毎回、同じ回答をする俺の身にもなってくれ。俺はロボットじゃない！』って怒られたんですね。同じ質問を繰り返すことが、人を不快にさせることだって、それまで知らなかったんです」

スイカちゃんの生い立ちは壮絶で、両親のパチンコ依存、ネグレクト、親が外国籍であることを隠されていたなど、社会問題のデパートのような人生を送っている。根本にある不安定さは、そうしたこととも関係があるのだろう。

「ちゃんとしなきゃと思う部分と、全部ぶっ壊してやりたい気持ちがあって、心が一つにまとまらない。別々の感情が、ずっと綱引きをしているんです。その男に、『あなたはちゃんとしたいと言うけど、そもそもちゃんとできない人間性なのに、ちゃんとしようとするからいろいろとおかしくなる』と言われた。自分の生い立ちに引っ張られていることとか、持っているものと求められているものの差が、どれだけ大きいかを指摘されて、俯瞰で物事を見られるようになった。その人と会ってから、少し生きやすくなったんですよね」

スイカちゃんにとっては、学びある出会いだったのだろう。しかし、男は限界だったようだ。

「最終的に彼からは、『君と話してると自分の価値が下がる。俺は医者でも教師でもないから、同じことを言われたくない。病気を治してから出直してこい』と言われました。病気じゃなかったらお前と会ってないよ！　と思いましたけど」

強烈さにおいて、スイカちゃんが勝ってしまったのだろう。死の淵を歩いている人には、ある種のパワーがあるものだ。

——なんか全力で生きてる感じがする。

「それ、よく言われます。傷つくことって、すごく楽しいんですよ。自傷行為みたいに、痛みがあると生きてるって感じがする！」

やはりスイカちゃんは、ただ者ではない。

「私思うんですけど、メンヘラは全般的に、ぶつかってぶつかって全力で傷ついて生きてるからメンヘラになるんですよね。ぶつかることを避ける人だったら、そもそもメンヘラにならない」

一連の出来事を聞き終えた私は、スイカちゃんが、ただただ逞しく見えた。この世で、もっともまっすぐに生きているのは、実はメンヘラなのかもしれない。